

(1)はじめに ※邪馬台国論争については未決着につき説のみ記載。

①邪馬台国論争

邪馬台国論争は既に江戸時代から始まって、明治時代に到り、近代的な学問として再出発したが北部九州説と畿内説と言う二大潮流が生まれ終わりなき論争へと進展している。

畿内論者は「纏向遺跡の出現は三世紀初頭であり、ヤマト朝廷誕生を意味する前方後円墳の出現は三世紀のことであり邪馬台国時代と纏向はピッタリ重なる」と言い、北部九州論者は「纏向の出現は三世紀後半以降で北部九州の邪馬台国が東に移って纏向は生まれた」と反論する。邪馬台国連合の所在地については畿内倭説と九州説が対立して決着を見ていない。倭人伝の記事のままでは、邪馬台国は大和でもなく、九州でもなく、遙かに遠く太平洋のど真中の海中になってしまう。そこで色々な解釈で両者の論争が始まった3世紀の編者は多分、帯方郡の使者の報告をもとに記載した為に魏志倭人伝に記載された当時の各国まで魏志倭人伝に記載された当時の各国までの距離と方角の情報が辻褄が合わない。
・5世紀頃には畿内勢力がほぼ日本全土を統一していたので随書でも「倭国は耶麻堆に都す。乃ち魏志の所謂邪馬台なる者なり」
・日本書紀の編者は卑弥呼を神功皇后に見立て為に神功皇后の生存年代を百年以上も遡って卑弥呼の時代に合わせている。更に邪馬台国は畿内大和との固定観念が見られる。

・畿内説: 松下見林、新井白石、

・九州説: 本居宣長、近藤芳樹、

邪馬台国東遷説 仮に神武東征のように九州からヤマトへの移動があったとすると;

なぜ対馬を中心とする海の民(安曇氏)が大陸との交易に便利な北九州から

貿易の中継点としてヤマトへ軸足を移したかの要因として二つ挙げるとすると;

関悠二の推測

第一は「鉄の市場開拓」として、鉄器を北部九州だけで独占するよりも鉄等の売りさばき相手として「東国との流通ルート」を確保したかった。対馬からみると北九州の奴国、伊都国は大陸貿易の中継点として重要であったかも知れない。第二はヤマトの日田への進出問題

九州の邪馬台国の場所として、大宰府でもなく、吉野ヶ里でもないとした場合大分県日田あたり(小迫辻春遺跡)ではないかと関悠二氏が言う。そして出土した土器が殆ど「畿内の土器」であったことから、畿内の纏向が日田を攻略したのではないかと推測。

吉野ヶ里遺跡

佐賀県神埼市吉野ヶ里町(縄文時代～弥生時代～古墳時代まで遺跡)1980年代に大規模工業団地の建設が立案され事前調査が始まったがとてつもない遺跡である事が判明して平成元年(1989)には国営歴史公園として動き出した。この立地は筑後川両岸に佐賀平野が広がり東西を流れる2本の川を下れば筑後川に出て有明海に直通している。弥生時代初頭に遺跡南部には南北250mの楕円型環濠集落が萌芽として認められている。更に弥生時代前期前半には北側に2.5ヘクタールの環濠集落が出現しており、竪穴住居や甕棺墓・土壇墓跡が残り、青銅器の鋳造跡も見られてかなり早く青銅器の生産が始まっていたようである。中期に入ると推定20ヘクタールと相当大規模になってくる。後期の吉野ヶ里は更に発展して40ヘクタールを超す大集落に発展している。吉野ヶ里集落の特徴として、農耕の痕跡が見られず、絹製品が多く発掘されたり、青銅器の生産が行われていたようである。水運の地の利が良い所から「交易国家」で50棟もの倉庫群の跡も穀物倉ではなく、手工業と交易品の貯蔵庫ではないかとの説もある。

小迫辻春遺跡(大分県日田)

弥生時代末から古墳時代にかけての遺跡。1983年、大分自動車道建設に先立ち「弥生式土器の良く出るところ」として調査が開始されたが、1988年古墳時代初期の四角形の濠をめぐらせた居館遺構が二基発見された。その後の調査で三つの環濠と八十軒の竪穴住居跡と数棟の掘立柱建物、日本の条溝が見つかった。これ等は邪馬台国とヤマト建国の時代に相当する。また小迫辻春遺跡から出土する土器が畿内と山陰産が殆どである。一、二号の環濠の内外は庄内式古段階の竪穴住居跡が見られ、三期は布留式土器段階に相当する。

・I期: 庄内式土器(3c～3.5c)1号環濠、竪穴式住居跡

- ・Ⅱ期：庄内式新段階1号～2号環濠
- ・Ⅲ期：布留式土器(3.5c～4c)2号～3号環濠
- ・Ⅳ期：布留式土器(無くなる)

②魏志倭人伝

晋の陳寿(233～297)筆録

正式には「三国志・魏書・東夷伝」のこと

倭人伝によると帯方郡の使者は朝鮮半島の西岸を下り、釜山に近い狗邪韓国、対馬、壱岐を経て、末盧国から伊都国を通り、奴国に到着する。

問題点 朝鮮半島の帯方郡から邪馬台国に至る行程に問題がある。

「倭人は帯方郡の東南海上の中にある」と始まる。

「狗邪韓国から海を渡り、千余里で対馬、更に対馬海峡を南に千余里渡って壱岐に至る。更に海を渡って千余里、末盧国に到り、九州島に上陸して、ここから東南に陸行5百里で伊都国、東南百里で奴国、更に東二百里で不彌国に到着する」とある。この先に問題の一節が北部九州から邪馬台国までの旅程には、「南、投馬国に至る水行二十日(中略)、南、邪馬台国に至る、女王の都する所、水行十日陸行一月」とある。このまま読むと邪馬台国は福岡市から南に二十日行き、投馬国に至り、更に水行十日陸行一月で九州の遥か南の太平洋の海中。

(太平洋の南海に没しない解釈方法の例;)

・榎一雄の伊都国から放射説

・「水行十日・陸行一月」の解釈として水行または陸行で幾日要する。

・短里説：一里は現在435m、当時は83～100mとする。

・白鳥説：何等かの理由で魏志倭人伝の距離が誇張されている。

魏志倭人伝に書かれた邪馬台国までの行程には;

「郡従り倭に至るには、海岸に従いて水行し、韓国を経て、乍は南し乍は東し、其の北岸の狗邪韓国に至る。七千里」とあり、この最初の起点となる群は魏の朝鮮半島出先機関の有った帯方郡を指す。帯方郡は後漢末に遼東太守であった公孫度の子・康が楽浪郡の南部を分割して新設した行政区である。ここを出発した魏使達が初めて立ち寄った地が狗邪韓国で今の釜山西にある金海市と見られる。狗邪韓国の環濠集落跡には日本列島に起源のある遺物が出土しており、倭から魏へ使者を派遣する時にもここに立ち寄ったであろう。北九州の遺物は卑弥呼の死亡時期に当たる三世紀半ば以降のものは出土せずに、金官伽耶の時代に入ると近畿系の遺物が多い。その後、魏使は対馬～壱岐～北九州・末盧国～伊都国～奴国～不彌国まで訪問したのではないかとされている。

随書 7世紀 「倭国は邪摩堆に都す。即ち魏志の所謂邪馬台なる者なり。」とヤマト国は大和朝廷のある奈良と見なしている。

③伝統的大和説

(邪馬台国大和説根拠:3点他)

・卑弥呼は神功皇后とか倭姫命、倭迹迹日百襲姫と言った大和朝廷ゆかりの人物「古事記」の崇神天皇崩御の干支から計算して倭迹迹日百襲姫説が有力。

・「魏志倭人伝」の旅程方角の書き間違い(内藤湖南:東→南が正しいのでは)

・遺物や出土品などの考古学資料が卑弥呼の年代と合う。

・15世紀明で製作された地図「混一疆理歴代国都之図」で日本列島が南北に描かれており、古代から明代まで中国の地理感に誤りが有ったのではないかと33面の三角縁神獣鏡が出土した黒塚古墳や卑弥呼の時代と一致する庄内式土器の発掘されたホケノ山古墳などの遺構が見つかった。

・近くにある大環濠集落遺跡である唐古・鍵遺跡がBC1～AD2席頃まで続き3世紀に邪馬台国に吸収されたのか忽然として消えてしまった。

・唐古・鍵遺跡・纏向遺跡からは全国各地の陶器が多数発見されている。奈良で纏向遺跡が発見されてから俄然畿内説が元氣になってきた。なぜなら纏向遺跡の出現は三世紀初頭であり、ヤマト朝廷誕生を意味する前方後円墳の出現も三世紀の事であるから邪馬台国の時代と纏向とが重なるから。

・2009年12月、奈良県桜井市の纏向遺跡から大型建物群跡が発掘された。

・箸墓古墳は卑弥呼の墓ではないかとの説もある。古墳の周濠から発掘された土器表面の炭化物の炭素年代測定によると卑弥呼の年代に近い。

日本書紀

神功皇后時代に「魏志倭人伝」の邪馬台国を引用しているので邪馬台国はヤマトと解釈か?

「隋書」倭国伝も倭国の都がヤマトにあると記録。
書紀の編者が卑弥呼を神功皇后と見なしていた。
更に邪馬台国は畿内大和との固定観念が見られる。

北畠親房

南北朝時代の北畠親房は邪馬台国とヤマトを同一視している。

那珂通世

明治時代の日本東洋史学の創始者である那珂通世は上古年代考(M11、1878)と日本上古年代考(M21、1888)で卑弥呼と神功皇后の同一視は誤りと指摘し近代史学で初めて邪馬台国を論じた。

④その他 直木孝次郎

7世紀の推古天皇や斉明天皇と言った女帝もモデルにして創作された偶像が神功皇后であると提唱。

(2)邪馬台国論争

①畿内大和説

松下見林

江戸時代中期の儒医兼国学者の松下見林「異称日本伝」(1693)

(江戸時代)

- ・日本で初めて古代史研究に乗り出した人物である。
- ・後漢書の「倭奴国」は古の大養徳国(ヤマト)であると断じ、「耶馬台」はヤマトと読み大和(ヤマト)の国を指すと記す。
- ・女王卑弥呼は神功皇后と同一人物であると結論。
- ・耶馬壹国の「壹」の字に疑問を呈した。

偽僭説(キセン)

本当のヤマトは畿内にあったのに嘘をついた北部九州の卑弥呼が倭王と認められてしまったのではと以下の2名、新井白石と本居宣長は言う。

新井白石 新井白石「1657～1725」

(江戸時代)・倭人伝地理の記載を吟味始める

- 「古史通或問」(1716)で「邪馬台国は今の大和国なり」と述べ神功皇后は卑弥呼であるとしているが晩年には「邪馬台国九州説」となっている。
- ・白石は末蘆が肥前松浦、伊都が筑前の怡土郡、奴国が博多辺りと指摘。更に不弥が宇佐とし、投馬国は備後の鞆津、邪馬台国は畿内大和とした。
 - ・投馬国以降で南を東と読み替えている。
 - ・後年になって発音の類似から邪馬台国は九州の筑後国山門郡説を唱える。

本居宣長 本居宣長

(江戸時代)・魏書記載方角を魏書通りに解釈し邪馬台国は九州南方面と結論に達しながら邪馬台国は大和で卑弥呼は神功皇后の名前を騙ったものと見なした。

- ・魏書のヤマトは九州南と見極めながら卑弥呼は倭王を語る九州の女酋長で倭王は大和にあると結論した。
- ・邪馬台国が熊襲なら曾於郡が比定地と提唱。

内藤湖南

“1910”

白鳥庫吉の邪馬台国九州説に反論(白鳥説の「月と日の間違い」に反論)内藤湖南は「卑弥呼考」を著し、倭人伝に7万余戸とある大国は辺陲の筑紫ではなく大和が穏当であると主張。(考証すべきは地名であると主張)中国の古書は方角を東と南、西と北を誤る事は珍しくないので投馬国を北九州の南でなく東の周防国に比定し、また卑弥呼は垂仁の皇女ヤマトヒメと比定している。

和歌森太郎

三宅米吉 同調者として三宅米吉がいて彼は当時の中国では倭国が会稽・東冶の東にあると思われ、また風俗も中国南部と似ているとの事から倭国は南北に長いと想定されていたのではないかと主張。更にこの先入観を一步進めたのは和歌森太郎である。

山田孝雄 内藤湖南は東遷コースを瀬戸内海と考えたが、山田孝雄、笠井新也、末松

笠井新也 保和氏の3人は出雲経由の日本海コースでは無かったかと提唱。

末松保和 更に富岡謙蔵は卑弥呼に贈与された100枚の中国鏡について鏡を出す墳墓が畿内で、古墳からという事で畿内説を補強した。

卑弥呼は誰

更に、卑弥呼のモデルについても神功皇后説が言われていたが、湖南はヤマトヒメ説を避けて「タマトヒメ」を、笠井は崇神の叔母であるヤマトヒメ

を当て、その墓についても箸墓説を提唱した。
富岡謙蔵 弥生時代の北部九州で出土する鏡が後漢鏡かそれ以前のもので畿内は魏・呉・蜀の三国時代以降で占められていることから、弥生時代から古墳時代にかけて北部九州が衰弱して畿内が興隆した証と捉えて古墳が畿内中心に造られていた事からも卑弥呼の邪馬台国は畿内と推測。

②北九州説

九州説では邪馬台国は北九州南部の筑後山門郡あたりではとされている。九州説の場合でも遅くとも5世紀初めには国土は統一される。山門郡瀬高町にある女山に神籠石遺構があり、2～3世紀頃の銅矛が出土し、女山は女王山の略ではないかと言われている。また権現塚古墳や堤古墳群が卑弥呼の墓ではないかとの説もある。「魏志倭人伝」では「竹の箭は或いは鉄鏃、或いは骨鏃なり」と倭人が鉄の鏃を使うとの記載が有って、福岡は奈良の百倍程度の鏃が出土している。

近藤芳樹

近藤芳樹(1801～1880)

周防の学者で、宣長の考えを更に進めて卑弥呼は九州の女酋長で、邪馬台は肥後菊池郡の山門(ヤマト)とした九州説を唱えた最初の人。でありながら「卑弥呼はヤマトの号を盗み、住所を邪馬台と名付け自ら倭王と名乗り漢に通へり」と書紀の記事と調和させている。

那珂通世

那珂通世(1851～1908)

「上代年代考」(1878)、「上世年紀考」(1897)を著し、日本書紀の年代は推古9年(601年)から讖緯説に基づき1260年遡り神武即位をBC660年としたことを明らかにした。また応神天皇は4世紀後半の天皇として神功皇后は卑弥呼より約100年後の人であると推測した。つまり神功皇后と卑弥呼は別人と。

菅政友

菅政友は1890年に「倭国考」を著して西暦2.3世紀に中国人が倭と言ったのは筑後9国の事であると唱えた。同年星野恒は卑弥呼を「西陲の一女酋」とし、筑後山門郡にいた土蜘蛛の田油津姫の先代であると結論した。

星野恒

筑後国山門郡に邪馬台国があったと主張

白鳥庫吉

1910年「倭女王卑弥呼考」で邪馬台国は九州にあったと発表。

M43、1910

白鳥は魏志の旅程について帯方郡から邪馬台まで「一万二千余里」と記載があり、帯方郡から不弥国までの旅程が「一万七百里」であることから不弥～邪馬台国まで一千三百里となるので不弥～邪馬台国の記載距離が誇張された数値であると提唱。また「陸行一月」は「陸行一日」が正しいと主張。水行三十日は長すぎるが有明海を大きく迂回すると解釈。

・距離からすると邪馬台国は九州に納まる・

・「水行十日・陸行一月」は「水行三十日・陸行一日」の間違いと主張

・日数は実際より誇張されている。

・日本神話九州の「海彦・山彦」の争いは当時の「倭国と狗奴国」の争いを模していると解釈。

喜田貞吉

筑後国山門郡に邪馬台国があったと言う星野恒説を支持し、更に邪馬台国とヤマト朝廷は別物と推理。

大正

橋本増吉

橋本氏は一萬二千余里と水行・陸行の日程記事は別の出典によると考え里数記事は帯方郡の役人の報告によるもので日程記事は倭人等からの聞き取りによるもので誤りが生じたのではないかと提唱。

橋本は更に古墳埋葬の魏・晋鏡について鏡等は古墳のできた時代よりも人から人への伝達等でそれ以前のものであり、何年前のものかは不明なので年代は特定に利用は不適であると大和説に反論。

榎一雄

戦後、邪馬台国論争に新たな論争を投じたのは榎一雄の「放射説」

戦後

である。「魏志倭人伝」の日数問題解釈に一つのヒントを出した。

放射説

「魏志・倭人伝」では伊都国の前と後で記述方法が変更になっている

つまり「方向・距離・国」記載から「方向・国名・時間」に変わっている

榎一雄は旅程の記載方法が末蘆国までと伊都国以降では異なっている

事に着目して、伊都国以降の旅程は伊都国を起点に放射状に記されているとして、日程記事でも九州説は成立するとし、邪馬台国は筑後国の

山門郡と比定した。更に「水行十日・陸行一月」を水行で十日、陸行なら

一か月と解釈する事を提案した。

関悠二 山門郡瀬高町(現:みやま市)女山にある神籠石遺構
 高良山 久留米市御井町にある標高312mの山で高良大社(高良玉垂命)が鎮座する。
 参道を少し登ると両側に馬蹄石が出現する。(70*80)cmくらいの大きさの
 巨岩で山の周囲を囲んでいる神籠石である。白村江の戦い(663年)後に
 軍事目的で築造されたのではないかとの説もある。
 高良山は耳納山系の西はずれにあり、籠城しても兵糧が確保できる。
 山上からは筑後川・筑後平野が一望に望めると言う好立地にある。
 「肥前国風土記」によれば景行天皇の九州遠征時に高良に行宮をおき
 国見をしたと言われる。神宮皇后も北部九州遠征時に高良山麓の旗崎
 に滞在したと言われ、磐井の乱でもここが最後の戦場となっている。
 筑後国府も高良山麓に造られた。
 「魏志倭人伝」によれば邪馬台国は奴国や伊都国よりも奥まった所にあつた
 と記載されている。海に近い博多周辺は一端戦乱が起きると奇襲に逢う
 可能性が高く防衛上奥まった所が有利であるとも考えられる。実際白村江
 で敗れた後、中大兄皇子は大宰府付近に水城と大野城を築いているが、
 更に熊本に鞠智城(クチ)を築いている。この大宰府自体も遠賀川から直方
 平野を攻められると危険にさらされるため筑後まで引いて高良山あたりが
 最適な地となる。邪馬台国九州説で有力視されている山門は高良山と女山
 に囲まれた場所に位置する。
 大宰府や博多の地が長く北九州の中心であつたのは対韓・対支上であり
 軍事上で言えば筑後が最適なのかも知れない。
 高良大社 高良大社には高良玉垂命だけでなく豊比咩命も祀られている。
 豊比咩命(トヒメミコト)女神は筑後川周辺のあちこちで祭られている。
 福岡県宗像市の宗像大社の「宗像大菩薩縁起」によると「神宮皇后三韓
 征伐の折、船上で皇后が天神地祇、海神、水神を祀ると竜宮城から妹の
 豊姫が現れた」ので竜宮城の海神に使いさせて「「竜宮城の竜神と私は
 親子の契りで結ばれていた誼で乾珠・満珠(シホヒ、シオミ)をお貸し下さい」
 と海神の加勢を得て新羅を撃つことが出来たと言う伝承があり、神功皇
 後の三韓征伐後、豊姫は乾珠と満珠を筑後川流域の肥前河上宮に祀っ
 たと言う。
 高良大社では武内宿禰・真根子が祀られており、高良玉垂命は武内宿禰
 ではないかの伝承もある。と言うのは葛城襲津彦の末裔とされる臣が、
 筑後川上流の浮羽郡に勢力を張っていたこと、同じく「紀(丹波)氏」が
 高良大社の座主を務めていたことから。
 神功皇后とトヨの関係は他にも三韓征伐の時、穴門に建てた「豊浦宮」
 があり、「海幸・山幸神話」の豊玉姫も同じくトヨである。

神功皇后西走

三韓征伐 三韓征伐のため若狭の角鹿(敦賀)を出発した神功皇后は豊浦津で如意珠
 熊襲征伐 を得て、穴門に豊浦宮(山口県下関市)を建て、翌年春に筑紫の岡県主
 (福岡県遠賀郡芦屋町)が周防まで神宝を捧げて出迎えて九州へ、次に
 次に伊都県主(福岡県糸島郡)の出迎えで難県(福岡市)の檀日宮(カシノミヤ)
 へ入場し、荷持田村(朝倉市)を討って松峽宮(マツオミヤ)へ移り、ここ
 から山門県(山門郡山川町)の土蜘蛛の女酋長田浦津媛(タブラツヒメ)を打ち
 取ると海を越えて新羅征伐後、檀日宮へ凱旋した。

吉野ヶ里遺跡

1980年代に大規模工業団地の建設が立案され事前調査が始まったがとてつ
 もない遺跡である事が判明して平成元年(1989)には国営歴史公園として動き
 出した。この立地は筑後川両岸に佐賀平野が広がり東西を流れる2本の川を
 下れば筑後川に出て有明海に直通している。弥生時代初頭に遺跡南部には
 南北250mの楕円型環濠集落が萌芽として認められている。更に弥生時代
 前期前半には北側に2.5ヘクタールの環濠集落が出現しており、竪穴住居や
 甕棺墓・土壇墓・木棺墓跡が残り、青銅器の鑄造跡も見られてかなり早く青銅
 跡も見られてかなり早く始まっていたようである。中期に入ると推定20ヘクタール
 と相当大規模になってくる。後期の吉野ヶ里は更に発展して40ヘクタールを超す
 大集落に発展している。吉野ヶ里集落の特徴として、農耕の痕跡が見られず、
 絹製品が多く発掘されたり、青銅器の生産が行われていたようである。
 水運の地の利が良い所から「交易国家」で50棟もの倉庫群の跡も穀物倉で
 はなく、手工業と交易品の貯蔵庫ではないかとの説もある。

(3)邪馬台国東遷論

安本美典 天照大神と卑弥呼が重なるのではと提唱。

天照も卑弥呼も共に女性のシャーマンで、宗教的権威を持ち弟がいる。三種の神器は北部九州では副葬品であり、弥生時代に畿内には副葬は見られない等から邪馬台国は福岡県甘木市と比定。また甘木周辺には奈良盆地とそっくりの地名が残されている。

(福岡県朝倉郡夜須町付近の地名が奈良大和盆地の地名に似ている)

安本美典は十世紀後半の「延喜式神名帳」に出てくる高良山周辺の「高良玉垂神社、豊比咩命神社、伊勢天照御親神社」の3つの神社の存在から筑後川周辺に邪馬台国があったのではと推測している。

和辻哲郎 和辻哲郎は九州筑紫の邪馬台国が東に移ってヤマトを建国したと言う邪馬台国東遷論を提唱。ヤマト建国後畿内の銅鐸文化圏が消滅したのは九州の銅剣・銅矛文化が東に移ってヤマトが完成したと考えた。

(4)魏志倭人伝

A. はじめに

①魏志倭人伝

晋の陳寿(233~297)筆録

正式には「三国志・魏書・東夷伝」のこと

倭人伝によると帯方郡の使者は朝鮮半島の西岸を下り、釜山に近い狗邪韓国、対馬、壱岐を経て、末盧国から伊都国を通り、奴国に到着する。

問題点 朝鮮半島の帯方郡から邪馬台国に至る行程に問題がある。

「倭人は帯方郡の東南海上の中にある」と始まる。「狗邪韓国から海を渡り、千余里で対馬、更に対馬海峡を南に千余里渡って壱岐に至る。更に海を渡って千余里、末盧国に到り、九州島に上陸して、ここから東南に陸行5百里で伊都国、東南百里で奴国、更に東二百里で不彌国に到着する」とある。この先に問題の一節が北部九州から邪馬台国までの旅程には、「南、投馬国に至る水行二十日(中略)、南、邪馬台国に至る、女王の都する所、水行十日陸行一月」とある。・このまま読むと邪馬台国は福岡市から南に二十日行き、投馬国に至り、更に水行十日陸行一月で九州の遥か南の太平洋の海中になる。

②魏志倭人伝の「旅程」記事

「郡より倭に至るには、海岸に従いて水行し、韓国を経て、乍は南し乍は東し、其の北岸の狗邪韓国に至る。七千余里。始めて、一海を度ること千余里、対馬国に至る。其の大官を卑狗と曰い副を卑奴母離と曰ふ。居る所は絶島にして、方四百余里可り。土地は山陰しく、深林多く、道路は禽鹿の径の如し。千余戸あり。良田無く、海物を食して自活し、船に乗りて、南北に市糴す。又、南に一海を渡る事千余里、名付けて瀚海ち曰ふ。一支国に至る。官を卑狗と曰ひ、副を卑奴母離と曰ふ。方三百余里可り。竹林・叢林多く、三千許りの家有り。差田地有り、田を耕せども、猶ほ食するに足らず亦、南北に市糴す。又、一海を渡る事千余里、末盧国に至る。四千余戸有り。山海に浜ひて居る。草木茂盛し、行くに前人を見ず。好んで魚鰈を捕らへ、水深浅と無く、皆沈没して之を取る。東南に陸行すること五百里、伊都国に至る。東南に陸行すること五百里、伊都国に至る。官を璽支と曰ひ、副を泄謨觚(しまこ)・柄渠觚(ひここ)と曰ふ。千余戸有り。世王有るも、皆女王国統属す。郡使の往来、常に駐まる所なり。東南、奴国に至る、百里。官を兕馬觚(しまこ)と曰ひ、副を卑奴母離と曰ふ。二万余戸有り。東行、不弥国に至る、百里。官を多模と曰ひ、副を卑奴母離と曰ふ。千余戸有り。南、投馬国に至る。水行二十日。官を弥弥と曰ひ、副を弥弥那利と曰ふ。五万余戸有り。南、屋馬壹国に至る。女王の都とする所。水行十日・陸行一月。官に伊支馬有り、次を弥馬升(みまと)と曰ひ、次を弥馬獲支(みまわき)と曰ひ、次を奴佳鞮(なかつ)と曰ふ。七万余戸可り。女王国より以北は、其の戸数・道里は略載す可きも、其の余の旁国は遠絶にして、得く詳らかにす可からず。次に斯馬国有り。次に己百国(いはき)有り。次に伊邪国有り。……次に烏奴国(あなこく)有り。次に奴国有り。此れ、女王の境界の尽くる所なり。其の南に狗奴国有り。男子を王と為す。その官に狗古智卑狗有り。女王に属さず。郡自り女王国に至る、万二千余里。(岡本健一訳)

B. 魏志倭人伝の倭国

1) 北九州と比定国

①末盧国 九州の玄関口として交流の窓口の国力を充分保持していた。壱岐から海を千

余里渡り日本列島の上陸地点が末蘆国である。「四千戸余りで、山海に沿って暮らしている。人が見えないほど草木が生い茂り、人々は潜水して魚類やアワビをとる」と記載されている。末蘆国は現在の唐津市で久里双水古墳からは日本で珍しい舟葬の跡も発見されており、海人として生活していた事が分かる。唐津では縄文晩期の水田遺構も発見されている。近年の調査で末蘆国には国内を統一した強力な王が存在していて二代続いていた可能性が示されている。

②伊都国 福岡県西部の糸島市に比定されている。

魏志倭人伝では末蘆国から東南へ五百里の地点と記載されており、「戸数千余戸で、代々王位が継承されている。女王国に属し使者は一旦ここに留まる」と魏志倭人伝に記載されている。帯方郡からの魏使が最初に倭を訪問する場所であり、一大率と言う観察官が常駐していた。交易と物造りとして石斧・塩・勾玉を加工し大陸からは銅鏡などを入手し分配した。糸島市内にある三雲南小路・井原鑑溝・平原の三王墓からは中国製の銅鏡が出土し、平原遺跡からは日本最大級の内行花文鏡・直径46.5φが出土している。また楽浪郡の風習の伝来したものとして夫婦合葬の墓も見られ大陸と交流の窓口である事を窺わせる。

③奴国 現在の福岡市春日市

伊都国から東南百里進むと奴国があり、AD57年に後漢の光武帝から「漢委奴国王」の金印を授与され、これまでの登場国より遙かに大規模の戸数2万戸の集落とされている。奴国も弥生時代の農業に不向きな土地で、青銅器・ガラスなどの生産と交易で発展したと言える。春日市の須玖遺跡からは多くの工房跡が発見されている。当時の青銅器として広形銅矛・鏡・銅鐸・鋤、筒状銅製品鉄器、ガラス等の工房跡が見つかった。

④不弥国 候補地は福岡県糟屋郡宇美町から宗像にかけての一体と言う説がある。奴国から東100キロで不弥国であるが、以降の国は「魏志倭人伝」の記述が曖昧で、不弥国も千戸と言う小規模集落でその実態はよく解らない。それらしい遺跡として飯塚市の立岩遺跡があり、王墓王妃の墓、青銅器、鉄器など出土している

⑤投馬国 不弥国の位置は明確でない。投馬国は不弥国の次に登場する。「南、投馬国に至る、水行二十日」とあるが、この記事が投馬国への全てで、邪馬台国の7万戸に次ぐ5万戸の大規模であるが実態は解らない。これ以降旅程の記載方法が異なっており、移動は距離でなく所要日数に変わっている。次の邪馬台国に至る「水行十日・陸行一月」の記載から畿内説では広島県の鞆とか出雲説もある。

九州説でもこの旅程記事から比定地として日向、薩摩、肥後説がある。

⑥邪馬台国 次の邪馬台国の位置も不詳である。

邪馬台国に至る「水行十日・陸行一月」の記載は論争の種。

⑦二十一国 「魏志倭人伝」では邪馬台国の後に実態不明の21国が記載されている。

「斯馬国・己百支国・伊邪国・都支国・・・躬臣国・巴利国・支惟国・・・奴国」

⑧狗奴国 最後に邪馬台国の敵対国として狗奴国が記載されている。

狗奴国については九州肥後国球磨郡の熊襲説が有力だが紀伊の国熊野説や肥後国菊池郡城野説、尾張国、遠くは氣野国説まである。

その後の狗奴国について3説がある。

(東遷説) 邪馬台国との闘争に勝利して東遷して大和入りしたのでは。

(滅亡説) 邪馬台国との闘争に敗れて滅亡した。

(発展説) 邪馬台国との闘争で敗北を免れ熊襲となった。

2) 邪馬台国の概要

卑弥呼 邪馬台国は狗奴国(熊襲?)と長年争いを続けていたようである。

239年朝貢 卑弥呼は魏志倭人伝にあるように「倭の載斯(さいし)・烏越等を遣わして郡に詣り、相攻撃する状を説く。塞曹掾史の張政等を遣わし、因り手詔書、黄幢を齎し、難升米に拝仮し、檄を為りて之に告諭せしむ」とあるように状況を打開すべく魏に使者を送り調停役を頼んでいたとみられる。

魏志倭人伝「其の国、本亦、男子を以て王と為す。住ること七、八十年、倭国乱れ相攻伐して年を歴たり。乃ち一女子を共立して王と為す。名付けて卑弥呼と曰ふ。

卑弥呼 鬼道に事へ、能く衆を惑わす。年己に長大なるも、夫婿無く、男弟有り、佐けて国を治む。王と為りしより以来、見る有るもの無し婢千人を以て自ら侍せしめ、唯男子一人有りて、飲食を給し、辞を伝えて居拠に出入す。客室・桜観・城柵、厳かに設け、常に人有りて、兵を持して守衛す。・・・略・・・景初三年六月、倭の女王、大夫・難升米を遣わして郡に至り、天使に詣りて朝献せんことを求む。太守・劉夏、史を遣わし、将ち送りて京都に詣りしむ。其の年十二月、詔書して倭の女王に報じて曰く、「親魏倭王卑弥呼に制詔す。帯方の太守劉夏、使を遣わし、汝の大夫難升米、次使都市牟利を送り、汝

献ずる所の男生口4人・女生口6人、班布二匹二丈を奉り以て到る。汝が在、
る所、遥かに遠きも、乃ち使を遣わして貢獻す。是汝の忠孝、我れ甚だ汝を
哀れむ。今汝を以て親魏倭王と為し、金印紫綬を假し、装封して帶方の
太守に付し假授せしむ。汝、其れ種人を綏撫し、勉めて孝順を為せ。
……略……故に丁重に汝に好物を賜ふなり」と。……略……

其の八年、太守・官に到る。倭の女王卑弥呼、狗奴国の男王卑弥弓呼と
素より和せず。倭の載斯烏越等を遣わして郡に詣り、相攻撃する状を説く。
塞曹掾史張政等を遣わし、因って詔書・黄幢を齎し、難升米に拝假せしめ、
檄を為りて之を告諭す。卑弥呼以て死す。大いに塚を作る。径百余歩。
奴婢百余人。更に男王を立てしも、國中服せず。更に相誅殺し、当時千
余人を殺す。

(邪馬台国論争:岡本健一)

邪馬台国女:二世紀末に倭国大乱で、諸国が共立した女王で戦乱は治まった。

卑弥呼とは239年に魏に使者を送り、親魏倭王の称号を授与された。

卑弥呼は独身で鬼道によって国を治め、それを男弟が助けていた。日本書紀
には、卑弥呼の時代から百年ほど後で、神功皇后の項の割注に「魏志に言う」
と但し書きがあり、倭の女王が魏に使者を送ったとある。魏志倭人伝には卑弥
呼が邪馬台国の女王だとはどこにも記載がない。倭国とは邪馬台国、伊都国
・奴国など三十余りの諸国連合の総称。卑弥呼は邪馬台国の女王ではなく
倭国の女王と言う方が正しいのでは。卑弥呼の読み方についても、ヒミコ、
ヒメコ、ヒメオ等何通りかの説があり、ヒミコは名前でなくむしろ、役職名では
ないかと言われている。

皇女(ヒミコ天皇の娘)、日の御子(天照大神)、姫児(ひめこ)等の地位。日御子
(荒井白石説)、姫児(本居宣長説)、姫子(坂本太郎説)、姫尊
60余年倭国の女王として君臨したであろうと言われている。

卑弥呼の比:卑弥呼は誰か、多くの比定説があるが未定。

神功皇后説(日本書紀)、倭姫命(内藤湖南)、倭途途日百襲姫(新井白石、
笠井新也)、天照大神説(安本美典)、九州熊襲女酋長(本居宣長)、卑弥呼の
卑弥呼の鬼:鬼道は中国道教の影響下で漢末期の五斗米道教団の張魯と同じようなものと
陳寿は理解していたのではないか。

鬼道の具体的なイメージとしては古代信仰のシャーマニズムとアニズムの結合したよう
なものではないかと言われている。

政治形態 聖俗二元王権と呼ばれ、祭祀は卑弥呼が、政務は男弟と言う男女ペアの祭政
一致の政治形態ではないかと推定されている。

播磨の「吉備比売、比古」、古事記の「狭穗姫・狭穗彦」など例がある。

宮殿 「王と為りしより以来、見る有る者少なし。碑千人を以て自ら侍らし唯男子一人
有りて、飲食を給し、辞を伝えて居所に出入す。宮室・楼観・城柵、厳かに設け、
常に人有りて、兵を持して守衛す。」とある。

卑弥呼の館は見晴らしの良い丘の上にあった。周囲に堀が巡らされ内側に城柵、
が立ち、物見櫓が建てられて、居館の周りには兵が配されて常に厳戒態勢に置
かれていた。再現された吉野ヶ里が彷彿される。

卑弥呼の宮殿の門を入ると居館である祭祀棟と政治棟が並列し、祭祀棟は公的
な宮室と私的な居住部があり庫裏もあったであろう。政治棟には弟が、両棟の間
には千人の奴婢の為の建物と並んでいた。卑弥呼の没後、倭国は荒れ、一時

卑弥呼没 男王が立つが千人もの死者を出す大規模な内乱が起きている。

そこで、諸国が集まり、二代目卑弥呼として十三歳の少女・台与を女王にする事
で決着した。

台与(とよ) 魏志倭人伝によれば;

魏 卑弥呼没後に再び倭国に内乱が起こり、十三歳の台与が女王となる。台与も魏に
朝貢して奴隷30人、真珠5千個等を献上した。当時の献上品は麻織物・玉石・生口
などで、後漢からは絹織物・金銅鏡等高級品が下賜された。

晋 台与は晋王朝が誕生した翌年266年に司馬炎に朝貢した。

266年 316年に晋が滅ぶと倭国連合も戦乱時代へ突入し、倭の五王時代まで、暫く中国の
史書に現れなくなる。

三国志 三国志・魏書東夷伝によれば中国東北部は魏の他に倭・扶余・高句麗・東沃沮・
魏書東夷伝 挹婁・濊・韓について記す。

魏 以降中国東北部は三国志魏書によれば公孫氏を滅ぼした魏国の支配下となる。

扶余 扶余は吉林省を本拠に漢・魏と友好関係を結び5世紀末に滅んだ。

高句麗 高句麗は遼寧省辺りを本拠に濊や東沃祖を支配下にしていたが、244年に魏の

魏の支配下に落ちたが、4C～5Cに勢力を盛り返して好太王の時代には遼河・から吉林省・百済まで領有した。

414年建立の好太王碑には391年に高句麗と倭が争ったとの一文が有る。

400年には好太王が五万の兵を率いて新羅に遠征し倭は一時退却したが

404年再び帶方郡まで進出したと記されている。

3) 邪馬台国の生活と文化

魏志倭人伝による生活スタイルを以下に記載。

気 候 魏志倭人伝の記事

「倭の地は温暖、冬夏生菜を食し、皆徒跣す」

・倭国は温暖で、冬でも夏でも野菜を食べており、誰もが裸足であった。BC1～AD7の古代は異常気象で小氷河期に属していたようである。この時代、中国南部の朝貢までが氷結して穀物が獲れず、倭では洪水で耕地が水没したと言う推測もあり、気候変動で世相が乱れた。卑弥呼の時代、中国ではAD220年に後漢が滅び、朝鮮半島では朝鮮族が蜂起して中国の出先機関を襲撃している。

言 語 倭国に入った魏志は人名、地名、国名の音の響きを漢字に写して表記。倭人伝に書かれる固有名詞は6～7世紀の日本語に近いと思われる。

(卑狗＝彦、卑弥呼＝姫御子、はい＝おう噫・・・)

倭人の言葉を復元すると現在の沖縄の言葉に近いと言う分析があるが日本語は南方系の言語に北方系の言語が重なって成立と言う説もある

衣服と髪型 弥生時代倭人の服装は男女とも貫頭衣を着ており、男性は下にズボン、女性は下に巻きスカートを身に着けていた。(埴輪等から推定)

縄文時代は網布であったが弥生時代には織布に変化した。弥生人は機織りで縫った麻布の衣服を着た最初の日本人であった。更に弥生時代には染色技術も発達して白色のみならず、赤や紫に染めた布も使われた。

装飾品は呪術的な意味と権威づけで髪飾り、首飾り、指輪などが使われた。

化 粧 刺青の風習が有った。

「男子は大小となく、皆鯨面分身す」とあり続いて「倭の水人、好んで沈没して魚鮑を捕え、分身しまた大魚・水禽を厭う。後やや以って飾りとなす」とあり、海に潜って魚介類を獲る場合に大きな魚から身を守る為に水中での身の危険から身を守るために刺青をしていたようだ。女性については記述が無いので不明。

食生活 魏志倭人伝記載と食材の遺物から穀類・魚介類・野菜・肉・飲酒などバラエティに富んでいたようである。とはいいながら人骨からは栄養失調などの傾向が見られる。

器の変遷 縄文時代は煮炊き用の土鍋が多かったが、弥生時代に入ると煮炊き以外に食器用土器、浅い鉢、装飾用なども見られるようになる。BC5世紀ころ、大型の甕や高杯が大陸から登場して浅鉢が消えた。BC3世紀頃の弥生前期には煮炊き用の甕に土製の蓋を被せるようになった。弥生時代中期から近畿地方では米食普及で高杯土器が主流となる。

